

芭蕉七部集の歌仙における大気現象について

——『阿羅野』・『ひさご』・『炭俵』・『讀猿蓑』の場合——

田宮兵衛

1. はじめに

芭蕉七部集の連句で取り上げられている大気現象について、主として歌仙を対象に、どのような脈絡で取り扱われているかを調べてきた。その目的は、大気現象に関する当時の理解を知り、現在との異同を探ることである。既に、『猿蓑』（田宮、1990、以下前々報）および『冬の日』（田宮、1992、以下前報）については、一応の報告を行ったので、今回は残された連句のうち、芭蕉が全面的に参加している歌仙についてこの作業を続ける。

芭蕉七部集には37の歌仙が掲載されている。各々の「発句の初五」を巻名として示すと第1表のとおりである。このうち芭蕉が全面的に参加したものは17である（第1表中無印）。全面的というのは、芭蕉と他の連衆（参加者）がほぼ同数の句を作っている場合である。『猿蓑』の「梅若菜」の巻は、連衆16名で芭蕉の句は3という、やや特異な連衆構成であるが、一応全面的参加とした。

他方、芭蕉が1句しか登場しない歌仙が『ひさご』、『炭俵』、『讀猿蓑』に各1つ（第1表中*印）ある。芭蕉が参加していない歌仙は17（第1表

中**印）あり、『春の日』の3歌仙にはいずれも芭蕉は参加していない。なお、七部集の連句としては、正式の歌仙37以外に『冬の日』、『春の日』に各6句の追加、『阿羅野』に半歌仙「我もらじ」、『炭俵』に百韻（百句からなる連句）および34句からなる歌仙「秋の空」がある。このうち、『冬の日』の追加に付いては前報において述べた。『春の日』の追加、『阿羅野』の半歌仙、『炭俵』の百韻および「秋の空」には芭蕉は参加していない。これらについては、後の課題とする。

したがって、本文で対象とする歌仙は次の8歌仙である。『阿羅野』の芭蕉と越人の両吟「雁がねも」の巻。『ひさご』の芭蕉・珍碩・曲水の三吟「木のもとに」の巻。『炭俵』の3歌仙、芭蕉と野坡の両吟「梅が香に」の巻、孤屋・芭蕉・岱水・利牛の四吟「空豆の」の巻、芭蕉・野坡・孤屋・利牛の四吟「振賣の」の巻。『讀猿蓑』の3歌仙、芭蕉・沾圃・馬寛・里圃の四吟「八九間」の巻、沾圃の発句に芭蕉・支考・惟然が一巻を付けた「猿蓑に」の巻（芭蕉・支考12句、惟然11句）、芭蕉・曲翠・臥高・惟然・支考が連衆となっている「夏の夜や」の巻（臥高8句、他は7句）。

第1表 芭蕉七部集の歌仙

撰集名	数	巻名	備考
冬の日	5	狂句こがらし、はつ雪の、つゝみかねて、炭賣の、霜月や	追加（6句）
春の日	3	春めくや**、なら坂や**、蛙のみ**	追加**（6句）
阿羅野	9	麦をわすれ**、遠浅や**、美しき**、ほとゝぎす**、 月に柄を**、雁がねも、落着に**、初雪や**、一里の**	我もらじ**（半歌仙）
ひさご	5	木のもとに、いろ々々の*、鐵炮の**、亀の甲**、疇道や**	
猿蓑	4	鳶の羽も、市中は、灰汁桶の、梅若菜	
炭俵	6	梅が香に、兼好も**、空豆の、道くだり**、振賣の、 雪の松*	秋の空**（34句）、 百韻**
讀猿蓑	5	八九間、雀の字や**、いさみ立つ*、猿蓑に、夏の夜や	

**：芭蕉不参加，*：芭蕉1句参加

2. 大気現象について

本作業で関心の対象としている大気現象は、降水に関するもの、風に関するもの、天候をあらわすもの、気温表現の4つに分類できる(前報、前々報)。連句の題材に関する古くからの分類には、大気現象に対応するものとして聳物(そびきもの：雲・霞など空中で広がっているもの)、降物(ふりもの：雨・露・霧・雪など)があり、これらは大気中の水にかかわる現象が多いので大部分が降水現象となる。この他の、風・天候・気温表現は古くからの分類にはないが、本作業では対象とする。なお、季節現象は大気現象と密接に関わっていることが多いが、単独の季節名の場合は対象としない。

大気現象に関して詳細に見る、という作業の意味について以下に簡単に述べておく。まず、筆者の直接の関心は、16世紀から19世紀かけての小氷期とも呼ばれる世界的な低温期という古気候学的事実に対応する特徴が、当時の文学的作品に見いだされるかどうかという点にある。文学的作品として歌仙を選択した理由は前報において述べたが、それに加え、様式が決まっている文学的作品が定着しているならば、このような作業はそういうものから着手したほうが容易であることを指摘する。

ついで、連句の式目(禁制的規則)に対する関心がある。前記の聳物・降物に関する式目は、各々共通に、2句迄は続けてもよい(句数)、しかし1度出したら次に出すまでに2句以上明けなければならない(去嫌)、ということになっている(乾・白石、1980)。上野(1992)によれば、各種の題材のすべてについてこれを確認した注釈はない、ということである。したがって、大気現象に着目した注釈、あるいは従来与えられている注釈の検討という作業もないことは確実と思われるので、本作業が議論の出発点としての資料整理となることを期待している。すなわち、芭蕉が取り上げた「風」に関する高橋(1992)の論考などに対比すれば、本文はその遥か手前の段階における準備的作業を行っているにすぎない。

さらに、このような作業を通じて、古人の大気現象への心の持ちようをさぐることができれば、

古人の環境あるいは風土に対する考え方を知る手がかりとなろう。このことは、話は大袈裟になるが、テーヌが『英文学史序論』で言う(丸山訳1939による)文学的作品を通じて古人の精神状態を再発見できる、ということを感じている意味になる。精神状態を決める原動力として、血族・時勢とともに挙げた環境の筆頭に、テーヌが位置づけた風土(気候)と精神状態の係わりを論ずるといふ、テーヌにおいては部分的問題に過ぎないかもしれないが大きな問題に接続することを期待している。

3. 大気現象の具体例

以下まず、各歌仙における大気現象について、中村(1962, 1966)、上野・白石(1990)の注釈を参考にその取り扱われ方を検討する。なお、安東(1981, 1986, 1989, 1990)の注釈は、8歌仙すべてを取り上げてはいないが適宜参考にした。

大気現象を含む句における大気現象の位置づけ、前・後句との関連における大気現象の役割を見るために、当該句とその前・後句を示す。番号は発句からの順番である。その後、当該大気現象についての説明、前・後句との関連を述べる。大気現象を含む句が連続する場合、および1句を隔てて出現する場合(初めの大気現象を含む句の後句が、次の大気現象を含む句の前句となっている場合)には、それらを続けて示す。この場合には説明がやや煩雑になる。

句を示すに当たっては、大気現象に下線を付し、各句の季を[], 作者を()内に示す。なお、季は中村(1962)により、春：f, 夏：s, 秋：h, 冬：w, 及び雑句：zの記号で示す。大気現象が季語となっている場合はさらに*を付した。漢字の字体はJIS第二水準とし、反復記号は々々で置き換えた。この他黙読して内容を把握するのに必要と思われる範囲のふりがなを前記注釈書などにより付す。

(1) 「雁がねも」の巻

5. 瓢箪の大きき五石ばかり也 [z](越人)
 6. 風にふかれて帰る市人 [z](芭蕉)
 7. なに事も長安は是名利の地 [z](芭蕉)
- 第6句の市で何かものを売る人物は、「風」に吹

かれて帰るような軽くわびしい人物である。前句の瓢箪の大きさの非現実的性との対照であるが、「風」に吹かれるということはぶら下がっている瓢箪が「風」に揺れることから連想であろう。後句の長安は、「風」に吹かれるような人物とは対照的な、名声と利得ににぎわう街として出て来たのあろう。したがって、「風」は市人を形容するにとどまる。

8. 医のおほきこそ目ぐるほしけれ [z](越人)

9. いそがしと師走の空に立出て [w](芭蕉)

10. ひとり世話やく寺の跡とり [z](越人)

第9句の「師走の空」の「空」は、具体的な天候等大気現象が起こっている天空をさすものではなく、師走のある日のことである。前・後句との関連は忙しさにあり、「空」は直接関わらない。

11. 此里に古き玄蕃の名をつたへ [z](芭蕉)

12. 足駄はかせぬ雨のあけぼの [z](越人)

13. きぬ々々やあまりかぼそくあてやかに [z](芭蕉)

第12句は、「雨」が降っている日の朝でも、高下駄を履かせない、ということである。この事態を、前句との関連では里方の旧家のしきたり、後句では朝の別れに際し男の帰りをあてやかに引き留める女の手管ないしは心づかいとしている。「雨」は句全体を通じて、前・後句と密接に関わっている。

25. ほととぎす鼠のあるゝ最中に [s](越人)

26. 垣穂のさゝげ露はこぼれて [s](芭蕉)

27. あやにくに煩ふ妹が夕ながめ [z](越人)

28. あの雲はたがなみだつゝむぞ [z](芭蕉)

29. 行月のうはの空にて消そうに [h](越人)

30. 粘も遠く鞍にいねぶり [h](芭蕉)

第26句は、垣根の大角豆に降りた「露」がこぼれ落ちていることの描写である。前句との関連では、鼠が荒れ騒ぐ音を聞いているとほととぎすの鳴き声が聞こえたという朝の風景になり、時刻を定めている。後句の恋に煩う妹はこれを夕方の風景として見ているが、この場合「露」ははかなさの象徴となる。

第28句は、上空に見える「雲」は誰の涙を包んだ「雲」か、といっているのであるが、前句との関

連では、涙を流しているのは恋に煩う女性である。後句とは、その「雲」の中に「上空」の月が消えて行くという関連となり、いずれにおいても、現実存在している「雲」を見ている。

第29句、前句との関連は上に述べた。後句で、遠くの砧の音を聞きながら馬上で居眠りをしているのは、朝になって月が「上空」で消えて行く時分である。「上空」は月のある場所を示すに過ぎない。

本巻の大気現象を含む句は6句、降水に関するもの3、風に関するもの1、天候をあらわすもの2、気温表現はない。ただし、「師走の空」、「うはの空」を、天候をあらわすものとした。何れも、季語とはなっていない。

(2) 「木のもとに」の巻

1. 木のもとに汁も 鱈も櫻かな [f](芭蕉)

2. 西日のどかによき天気なり [f](珍碩)

3. 旅人の風かき行春暮て [f](曲水)

脇¹⁾の、のどかな「よき天気」の日の午後²⁾にあり得る場面として、発句はたけなわを過ぎつつある花見の宴の様子を目前にとらえ、後句ではやや遠景に帰りつつある旅人ととらえている。いずれにおいても、「よき天気」が中心的題材となっている。

7. 鞍置る三歳駒に秋の来て [h](芭蕉)

8. 名はさまざまに降替る雨 [z](珍碩)

9. 人込に諏訪の涌湯の夕ま暮 [z](曲水)

第8句は、降雨現象に対して、様々な名称が与えられる変化が早い現象であることを指摘している。前句はそれを馬の生育の早さと関連付け、後句は「雨」の日の夕方、各種の客が入れ替わり立ち替わり混浴している諏訪の温泉の状態と関連させている。前・後句とも「雨」が密接に関わっている。

13. 物おもふ身にももの喰へとせつかれて [z](芭蕉)

14. 月見る顔の袖おもき露 [h*](珍碩)

15. 秋風の船をこはがる波の音 [h*](曲水)

16. 鷹ゆくかたや白子若松 [h](芭蕉)

第14句の「露」は前句との関連では、月を見ながら物思う人が流す涙のことになる。後句では船客が「秋風」に立つ波に船を恐がっているのであるが、波のしぶきと「露」を対応させている。場面

は異なるが「露」の役割は重要である。

第15句からみた前句との関連は上で述べた。後句は船客が伊勢湾を通り船から西を眺めている風景であり、「秋風」との関連は季を除けばない。

17. 千部讀む花の盛の一身田 [f](珍碩)

18. 巡禮死ぬる道のかけろふ [f*](曲水)

19. 何よりも蝶の現ぞあはれなる [f](芭蕉)

第18句の「陽炎」は、巡礼が行き倒れて死んでいる風景を、「陽炎」のはかなさあるいは「陽炎」を立たせる強い日射しとの対比により強調している。前句との関わりは、その巡礼が春の盛りの一身田（第16句の白子・若松に続く地名）の寺で千部経を讀誦していたのかもしれないという点にあるので、「陽炎」は直接は関わらない。しかし、後句の蝶は、死せる巡礼を浮かびあがらせて強調する「陽炎」と同様の効果をあげている。

31. 花薄あまりまねけばうら枯れて [h](芭蕉)

32. 唯四方なる草庵の露 [h*](珍碩)

33. 一貫の錢むつかしと返しけり [z](曲水)

第32句の「露」は前句のすすきに対応し、両句を通じてのうら寂しさの象徴でもある。後句で借金を返すのは、草庵の住人であり、やはり「露」に象徴される寂しさが関連する。

本巻の大気現象を含む句は6句であるが、露が2句で使われているので現象としては5つとなる。降水に関するもの2、風に関するもの1、天候をあらわすもの2、気温表現は無い。ただし、「かけろふ」は天候をあらわすものに含めた。「よき天気」、「降り替わる雨」の2つは季語にはならない。

(3) 「梅が香に」の巻

4. 上のたよりにあがる米の直 [z](芭蕉)

5. 宵の内ばら々とせし月の雲 [h](芭蕉)

6. 藪越はなすあきのさびしき [h](野坡)

第5句の「バラバラ」は原文では濁点が無いので、ハラハラでもバラバラとも読み得るようであるが、いずれにしても月が見え隠れする雲から雨が降っていたという時雨模様の天候である。前句の米価上昇の情報に対する不安をそのもの、あるいは不作をもたらす天候への不安と結びつく。秋の雨の後の夜、隣人と話をしている寂しさと静か

さが後句である。秋の雨が中心的題材となっている。

9. 奈良がよひおなじつらなる細基手

[z](野坡)

10. ことしは雨のふらぬ六月 [s](芭蕉)

11. 預けたるみそとりにやる向河岸 [z](野坡)

第10句は六月に「雨」が降らないことを述べている。現在ならば空梅雨を嘆いていることになるが、当時は太陰暦なのでそうはならない。太陽高度に対応する大気大循環の季節推移に基本的に対応し、東北地方南部以西では太陽暦の6月中旬から7月中旬に起きる梅雨現象は太陰暦の六月には対応しない（以下和数字で太陰暦、洋数字で太陽暦を示す）。さらに太陰暦には閏月があることを考えると、当時の季節感と暦の月の関係について我々は何等具体的イメージを持っていないことに気づく。なお、この歌仙は元禄7年(1694)年一・二月頃作られたと推定されている（中村、1966）ので、その前数年間の六月をグレゴリオ暦に換算すると（内田、1975）、1693年は7月3日～8月1日、1692年は7月14日～8月11日、1691年は6月26日～7月24日、1690年は7月6日～8月4日である。3年程度に1回加えられる閏月が六月の直前にはいると、太陽暦では7月中旬以降となり梅雨明け後なので雨は降らなくて当然である。閏月から時間が経てば、六月は早くなるがその場合でも6月下旬からであり、梅雨期の後半が含まれるにすぎない。元禄7年は五月が閏月で六月は7月22日からと、この前後の年と比較すると遅くなっている。したがって、いささか考えすぎかもしれないが、第10句は今年の六月は雨が降らぬと予報しているとも考えることも可能であろう。

前句の小規模の行商人は、好天続きの六月に対して何等かの感情を持つのであるが、暦の月に対する季節感の関係が分からないと、「雨」に邪魔されないので商売がはかどると喜んでいるのか、「雨」がふらぬと暑くて困るというのか分からない。後句は「雨」が降らなければ高温となり塩分を補給するため味噌の消費が進むので対岸に預けてある味噌が必要になったという関連付けが普通なされている。川の水量が減ったので簡単に渡たれて味噌も取りに行けるという解釈は、六月が梅雨による増水期の後になるとすればことさら出

て来る話ではない。前・後句とも「雨」の降らぬ六月が問題である。

15. はつ^{カリ}に乘懸下地敷て見る [h](野坡)
16. 露を相手に居合ひとぬき [h*](芭蕉)
17. 町衆のづらりと酔て花の陰 [f](野坡)
第16句で「露」の降りているなかで居合抜きを試みる人物は、前句では乗り懸けの駄賃馬の鞍の敷物を試している。これを旅立ちの様子とすれば時刻は朝、したがって朝「露」となる。後句では「露」を小粒銀とみなし、居合抜きをしているのは花見客の前の大道芸人とする。朝「露」にしても夜「露」にしても、大道芸人が酔っぱらいを前にして居合抜きする時刻ではないので、自然現象の「露」とは離れるのが当然である。

18. 門で押るゝ壬生の念佛 [f](芭蕉)
19. 東風^{コチカゼ}々に糞^{コノ}のいきれを吹きまわし [f*](芭蕉)
20. たゞ居るまゝに^{カヒナ}腕わづらふ [z](野坡)
第19句は、肥料の糞尿の臭いが「東風」によって広がっているという田園風景であるが、「東風」が春の季語となるのは、冬の北西季節風の終了後でないで減多に吹かない風であることによるのであろう。前句において、当時の京都の都市化の程度では壬生寺付近が田園風景であったという前提で、春演ぜられる壬生狂言と「東風」の季が同じになる。しかし、関東地方以东では「東風」は高気圧が北に偏った時に吹く寒冷・湿潤な風であるので、この感覚は得にくい。後句は腕の痛みを患っているのであるが、こういう痛みは、東日本の暖候季の低湿な「東風」と対応する。しかし、この風と糞いきれとの対応はよくない。

32. 魚に喰あくはまの^{ソウスイ}雑水 [z](芭蕉)
33. 千どり啼一夜々々に寒^{サマ}うなり [w](野坡)
34. 未進の高のはてぬ算用 [z](芭蕉)
第33句は冬に向かって季節が進んでいくことを言っているのであり、「寒」さは、前句の魚の雑炊に食べ飽きる、すなわち浜での漁労に馴染みきれない出稼ぎの漁師の哀愁に通じる。他方、後句は同じく冬に向かう頃、未納分の年貢の算段に苦勞している様子である。寒さが哀愁に通じることは、現在より昔のほうが切実であったろう。

本巻の大気現象を含む句は5句であるが、「ばら々々」を天候を表すものとしたので、現象としては6つとなる。降水に関するもの3、風に関するもの、天候をあらわすもの、気温表現は各々1である。「露」、「東風々々」の2つが季語となっている。

(4) 「空豆^{ソイマメ}の」の巻
2. 昼の水鶏のはしる溝川 [s](芭蕉)
3. 上張を通さぬほどの雨^{アメ}降て [z](岱水)
4. そつとのぞけば酒の最中 [z](利牛)
第3句は小糠「雨」が降っている風景である。脇の水鶏が昼間走りまわるのは、そのような天候の時にありそうなことである。後句は、そのような天気の時酒盛りをしても、そつとのぞくまでやってるかやってないかわからないような静かな酒盛りにしかならないということで、いずれも小「雨」降る天候と結び付いている。

5. 寝處に誰もねて居ぬ宵の月 [h](芭蕉)
6. どたりと塀のころぶあきかぜ [h*](孤屋)
7. きり々々薪の下より鳴出して [h](利牛)
第6句、「秋風」で倒れるような塀はどんな塀かと思うが、前句との関連を、台風の大風で塀が倒れたので、家中が起き出したとするには宵の月が出ていることは不自然である。誰か寝ているはずの所に誰も寝ていないような不景気な家の塀としても、また後句の塀が倒れたことに反応してキリギリスが鳴き始めるような情景にしても、「秋風」が季のみで前後句と関わりとする判断以上の説明は難しい。強い「秋風」が吹いている様子でもないので、ドタリの語感が現在と違うということも考えられる。または、擬声語を用いて滑稽をねらったとすると²⁾、それは現在まで通用しなかったということになる。

10. 僧都のもとへまず文をやる [z](芭蕉)
11. 風細う夜明がらすの啼^{ナリ}わたり [z](岱水)
12. 家のながれたあとを見に行 [z](利牛)
第11句の鳥が夜明けに鳴き、弱い「風」が吹いている様な時に、前句では坊さんに手紙を送っているのであまり晴やかな手紙ではないだろう。この様子には弱「風」より、夜明け鳥のほうが強く関わっている。後句では、家が流された跡を見に行

くのであるから、暴風雨の夜が明けて「風」が弱まったことになり、「風」が弱くなったことが重要である。

16. かれし柳を今におしみて [f](岱水)

17. 雪の跡吹はがしたる朧月 [f](孤屋)

18. ふとん丸げてものおもひ居る [z](芭蕉)

第19句は、おぼろ月がかかるような春の宵には、降った「雪」も吹き剝されたように消えてしまったという風景。前句において「雪」は柳を枯らした原因となる。樹木の「雪」害は、春の重い「雪」による場合が多いが、降「雪」の直後では枝折れしてもまだ枯れたという状態にはならないので、眼前の風景ではなく記憶されている枯れ柳のことになる。後句において、「雪」はふとんの連想として係わり、さらに「はがす」と「丸げる」が対応するが、自然現象の「雪」からは離れる。

24. 客を送りて^{ツツ}捉る燭臺 [z](岱水)

25. 今のまに^{ツツ}雪の厚さを指てみる

[w*](孤屋)

26. 年貢すんだとほめられにけり [z](芭蕉)

第25句で積雪深を測るのは、前句では燭台を掲げて客を見送りに出た人物である。客を見送るちょっとの間のことであれば、指で測れる程度の積雪である。したがって地面ではなく庭石の上など歩きながら手の届く範囲で測ったと思われるので、誰でもやることである。後句において測っている人物は、年貢を納め終えてほめられた農民である。多雪は翌夏の高温したがって豊作に対応するという言伝えを信ずれば翌年も年貢に悩まされないであろうことを予想してのことであり、この場合「雪」はかなり積もっている。いずれも、雪の厚さを指す行為と関わる。

27. 息災に^{ジジ}祖父のしらがのめでたさよ

[z](岱水)

28. 堪忍ならぬ七夕の^ジ照り [h](利牛)

29. 名月のまに合せ度芋畑 [h](芭蕉)

第28句では、七夕頃(太陽暦では8月)の暑さ・日「照り」を我慢できないほど厳しいと感じている。前句はそれでも年寄りが元気であることを喜んでいることになり、後句は、名月に供える芋は日「照り」に弱いので、出来が悪いこと、収穫が

間に合うかどうかを心配していることになる。前・後句いずれも日「照り」に対応した感想となっている。

32. 山の根際の鉦かすか也 [z](岱水)

33. よこ雲にそよ々々風^フの吹出す [z](孤屋)

34. 晒の上にひばり囀る [f](利牛)

第33句は横にたなびく「雲」が出ている時、そよそよ「風」が吹き始めたという風景である。弱い現象であるが、前・後句と関わり、前句の鉦を朝の勤行の鉦とすれば朝の風景、後句で雲雀が河原に晒している布の上方でさえずっているとすれば昼の風景となる。

本巻の気象現象を含む句は7句である。第33句に2つの気象現象が含まれるが、「雪」が2句にあるので、気象現象は7つとなる。降水に関するもの3、風に関するもの3、天候をあらわすもの1、気温表現は無い。「あきかぜ」、第25句の「雪」の2つが季語となっている。

(5) 「振賣の」の巻

1. 振賣の鴈あはれ也^ヒゑびす講 [w](芭蕉)

2. 降てはやすみ^ヒ時雨する軒 [w*](野坡)

3. 番匠が^ヒ榎の小節を引かねて [z](孤屋)

脇は、「時雨」が断続して軒をうって降る様子である。にぎやかな^ヒゑびす講で、棒の先に吊られて売られているあわれな雁に通ずるあわれさが「時雨」にある、として発句との関連を解釈できる。後句は、小屋の中で榎材を挽く番匠が小節に当たって難渋して休んだりしているということで、断続することを「時雨」と関連させるが、当然「時雨」が降る中の風景である。「時雨」が中心的題材となっている。

4. 片はげ山に月をみるかな [h](利牛)

5. 好物の餅を絶さぬ^ヒあきの風 [h*](野坡)

6. 割木の安き國の^ヒ露霜 [h*](芭蕉)

7. 網の者近づき舟に聲かけて [z](利牛)

第5句の好きな餅を欠かさない人物は「秋風」が吹く季節に、前句では斜面の一方が禿げた山にかかる月を見ているが、「秋風」は季を示す意味でしかない。後句は、もち米を蒸すのに必要な薪が安い地方で秋に「露霜」が降りているというので、「秋風」はやはり季のみで関わる。

第6句の前句との関連は上に述べた。後句では薪を積んだ舟に漁夫が声をかけているので、「露霜」は関係しない。

9. ひだるきは殊^{コト=イグサ}軍の大事也 [z](芭蕉)
10. 淡氣の雪に雑談もせぬ [w*](野坡)
11. 明しらむ籠挑灯を吹消して [z](孤屋)

第10句で「淡雪」が降る中で雑談もしていない人々が、前句が腹が減っては戦はできぬというような事態であるとすれば負け戦か、少なくとも勝ち戦ではない。後句を明け方、駕籠の提灯を吹き消すとすれば彼らは駕籠かきの二人であり、単に籠で作った提灯を吹き消すとすれば、彼らは「淡雪」のちらつく寒い朝に仕事から帰る人々となる。いずれも「淡雪」が中心的題材となっている。

17. 此嶋の餓鬼も手を摺月と花 [f](芭蕉)
18. 砂に暖^{ヌグ}のうつる青草 [f*](野坡)
19. 新畑の糞もおちつく雪の上 [f](孤屋)
20. 吹きとられたる笠とりに行 [z](利牛)
21. 川越の帯しの水をあぶながら [z](野坡)

第18句は、日が当って砂浜とそこに生える青草が「暖」まっている春の風景。砂浜があるのは前句の島で、そこの子供の様子も「暖」かく豊かな感じである。後句は、開拓した畑の「雪」の上に撒いておいた下肥も、この季節になると「暖」かさによって土に落ちていくという関連である。第19句の前句との関係は上に示した。後句は下肥が撒かれた畑に、春風で「吹きとられ」た笠を取りにはいる人物であるが、笠が「吹きとられ」ることは「雪」には結び付かない。

第20句の前句との関連は上に述べた。後句では笠は川越しする人物のもので、帯までの深い流れの中に危なげに取りに行っている様子である。ここでは、春風によるかどうかは問わないが、「吹きとばされた」笠を通じて風が関わる。

22. 平地の寺のうすき藪垣 [z](芭蕉)
23. 干物を日向の方へいざらせて [z](利牛)
24. 塩出す鴨の苞ほどくなり [z](孤屋)

第23句は、何かを干している菴の日が陰ってきたので「日向」にずらして移している。前句とは、それを寺の庭の風景として関連させているので、「日向」は直接は関わない。後句とは、干物を

洗濯物とし、塩漬の鴨を水に漬けて塩出しするという水仕事によって関連付けるので、ここでも「日向」は直接は関わない。

30. 壁をたゝきて寐せぬ夕月 [h](芭蕉)
31. 風やみて秋の鷗の尻さがり [h](利牛)
32. 鯉の鳴子の綱をひかゆる [h](孤屋)

第31句は、鷗が普段上げている尾の羽を落しているのを、強い「風」がおさまって安心していると解釈するのであるが、前句で壁をたたいていたのはその強「風」である。鷗は後句の鯉の生簀のまわりに居り、鯉をとられないように鳴子を鳴らさなければならぬ。「風」が強ければ鷗も鯉をとる余裕はないが、「風」がおさまったので鳴子をならさなければとすれば、「風」は前・後句に関わる。

35. どこもかも花の三月中時分 [f](孤屋)
36. 輪炭のちりをはらふ春風 [f*](利牛)
挙句は「春風」が輪切りにした炭の粉を吹き飛ばしているということであるが、前句に重ねて春の景色を続けてたものであり、「春風」は季で関わる。

本巻の大気現象を含む句は10句となったが、多いのは「吹きとられ(たる)」を風、「日向」を天候に加えたためもある。降水に関するもの4、風に関するもの4、天候をあらわすもの1、気温表現1となる。「あきの風」、「露霜」、「淡氣の雪」、「暖」、「春風」の5つが季語となっている。

(6) 「八九間」の巻

1. 八九間空で雨降る柳かな [f](芭蕉)
2. 春のからすの鳥ほる聲 [f](沾圃)
3. 堯句の8~9間はメートル法で15mくらいになるので、柳はかなりの巨木である。霧か霧雨が梢の葉に溜って落ちる水滴を「雨」と見立てたものである。後句は春の景色であるが、そこに霧雨のような柔らかな春の「雨」が降っているとすると感覚は容易に理解できるので、関連は深い。
4. 内はどきつく晩のふるまひ [z](里圃)
5. き^{シノ}のふから日和かたまる月の色 [h](沾圃)
6. 狗脊かれて肌寒うなる [h*](芭蕉)
7. 澁柿もことしは風に吹かれたり [h](里圃)

8. 孫が跡とる祖父ジジの借り銭 [z](馬寛)
 第5句では、月見のため天候を気にしていた人物が、昨日から「日和がかたま」ったこと、すなわち天候が晴れて安定してきたので安心している。前句とは、晩のふるまいを月見の宴、その準備で騒がしい状態をどさつくとした関連付けであり、天候の安定は前句の条件となっている。後句は、晴雨を繰り返しながら、ぜんまいも枯れて秋が深まって「肌寒」くなって行く様子であり、単なる季の対応以上の関係となっている。
 第6句の前句との関係は上述した。後句も秋であり、それを渋柿が今年台風「風」に吹かれて落ちてしまったという風景で示した。
 第7句と前句の関連は上記の通りである。後句は、父親不在で孫が家を継いだ、相続した中味は借金であるという貧乏な状態であり、この状態を表す一つの場面として、渋柿すらも吹き落とされてしまった状態を出したに過ぎないので、「風」との関連は弱い。

21. 長持コウゾウに小傘の仲間そは々と [z](沾圃)
22. くはらりと空の晴る青雲 [z](芭蕉)
23. 禪寺に一日あそぶ砂の上 [z](里圃)

第22句は、カラリと「空が晴」れ「青空(青雲)」が広がったことを述べている。その「青空」の下で、前句では晴を待っていた小傘人足が長持を運んでおり、後句では、禪寺の庭の清浄な白砂の上でゆっくりと一日を過ごしている。

30. 伴僧はしるノリモノ 駕のわき [z](芭蕉)
31. 削やうに長刀坂の冬フユの風 [w*](里圃)
32. まぶたに星のこぼれかゝれる [z](馬寛)

第31句は、冬の風をそぐようであると形容したものである。長刀坂という地名は、削るようなことから連想と考えられる。前句で僧が伴走している駕籠の中には高僧したがって老僧が乗っており、「冬の風」の冷たさを伴僧が案じていることにすれば関連は密接である。長刀坂を京都黒谷にある坂に特定する説もあるが、この場合黒谷付近には多くの寺があり、僧に結び付けるのは当然すぎてしまう。後句は、星の強い瞬きを、こぼれ落ちてくるように見るとしたものである。冬の高気圧が張り出してきて晴れた夜などに、上空の強風による空気の乱れで星の瞬きが激しくなる

のは気象光学的事実であり、それをまぶたにこぼれかかると表現した、とすることは無理な解釈ではないであろう。

35. 花ははや残らぬ春のたゞく来て [f](馬寛)

36. 瀬がしらのぼるかげろふの水 [f*](里圃)
 挙句の水は、「陽炎」の向こうで川が瀬となるあたりで揺らいている。前句の春の夕暮れの様子とは異なる春の風景を表しているので、単なる季での結び付けである。

本巻の大気現象を含む句は7句。降水に関するもの1、風に関するもの2。天候をあらわすものは「空の晴る青雲」を1つの現象として3、気温表現1。「肌寒う」、「冬の風」「かげろふ」の3つが季語となっている。

(7) 「猿蓑に」の巻

1. 猿蓑にもれたる霜しもの松露哉 [w*](沾圃)
2. 日は寒けれど静なる岡 [w*](芭蕉)
3. 水かるゝ池の中より道ありて [z](支考)

発句は、松露を取り上げた句が『猿蓑』にはないことを指摘したのであるが、松露が見落とされたことを、松露に「霜」が降りて周りで見分けが付き難くなったというように表現している。脇では松露がある場所を「霜」も融けられないような「寒い」岡の上としている。「霜」をことさら話題とするのは、どちらかといえば温暖な地域のことと思われるが、季のみでの結び付き以上のものがある。脇と発句の関連は上に述べた。脇の岡の上から見える、水が涸れ池底に道ができていた風景が後句との関係である。冬に涸水となるのは太平洋岸の地域であり、「水涸る」は季語になり得るかもしれないが、「寒さ」との関連は季にとどまる。

14. 山に門ある有明の月 [h](芭蕉)
15. 初はつあらし畑はたけの人のかけまわり [h*](支考)
16. 水際光る濱の小鯛 [h](惟然)

第15句は、その年の最初の台風タイフーンに農民が畑の手当に駆け回っている様子である。農民が駆け回っているという表現には少なからぬ人数が考えられる。台風の接近で夜中から次第に強まってきた風に、農民は夜明けと同時に一斉に畑の手当に取り掛かるといふ状況を、前句で有明の月の時刻に山門から眺めているという関連付けとなる。後句は小鯛

が背が光るほど水際に押し寄せたということで、鱸の大漁の幸運におそらく駆け回っているであろう漁民を、駆け回る農民に対照させている。「初あらし」は駆け回る理由であるが、後句とは直接は関わらない。

18. 荷持ひとりにいとゞ永き日 [f](支考)
 19. こち風の又西に成北になり [f*](惟然)
 20. わが手に脈を大事がらるゝ [z](芭蕉)
 第19句は春の季語である「東風」の風向が定まらない様子を言っているが、春には冬の季節風のように特定の風向が卓越することがないことの意味になる。前句とは春の永い日で季が対応する。後句は、自分で脈を測って、自己診断でおおごととしている病人のことであるが、風向の変動すなわち天候不順の体調への影響を意識したものである。

21. 大せつな日が二日有暮の鐘 [z](芭蕉)
 22. 雪かき分し中のどろ道 [w*](支考)
 23. 來る程の乗掛は皆出家衆 [z](惟然)
 第24句は、「雪」かきして道を作ったが泥道になってしまったという場面。前句から、季および日付が定まり、大晦日の前日の風景となるが、旧暦の年末に「雪」が降って泥道になるのは少なくとも「雪」国のことではないだろう。後句で僧が次々と乗り掛け馬に乗って来る道が泥道であるのは、季節が特定されていないので、「雪」国でも真冬をはずした季節ならばあり得ることであるが、「雪」の泥道でなくとも一景となり得る。

30. 寐汗のとまる今朝がたの夢 [z](支考)
 31. 鳥籠をづらりとおこす松の風 [z](惟然)
 32. 大工づかひの奥に聞ゆる [z](芭蕉)
 第31句は松を渡る朝の「風」がずらりと並ぶ鳥籠の鳥を起こしたことに、おそらく鳥が鳴き騒ぐことから気が付いている。この鳥の声を、前句で寝汗に悩んでいた病人が回復した朝聞いている。後句では、この声が大工を使っている奥にも聞こえている。風は鳥の声のきっかけであるが前・後句とは直接は関わらない。

本巻に大気現象を含む句は6句あり、降水に関わるもの2、風に関するもの2、天候をあらわすもの1、気温表現1である。「松の風」以外はすべて季語となっている。

(8) 「夏の夜や」の巻

1. 夏の夜や崩て明し冷し物 [s](芭蕉)
2. 露ははらりと蓮の縁先 [s](曲翠)
3. 鶯はいつぞの程に音を入れて [s](臥高)

脇の「露」が縁先の蓮の葉からはらりと落ちる様子は、発句で出された夏の朝の一場面であり、季での関連であるが、はらりと落ちるのは崩れるの縮小された場面と考えれば、もう少し関連は深まる。後句も鶯がいつの間にか鳴かなくなった、と引き続いて夏の様子であるが、「露」との関わりはうすい。

4. 古き革籠に反故おし込 [z](惟然)
5. 月影の雪もちかよる雲の色 [w*](支考)
6. しまふて錢を分る駕かき [z](芭蕉)

第5句は「雪」が来そうな「雲」の状態であるが、月影すなわち月光はその白さを「雪」にたとえている。前句では、革張りの籠にホゴ紙をしまい込んでいる。客観的にはホゴであるが本人には捨て難い書き物とすれば、その心情は決して明るいものではなく、雪を嫌う人物が「雪雲」の接近に感じるものに通じる。美濃山形郡出身の支考ならば、こういう解釈も可能であろう。後句では、駕籠かきが仕事を止めて稼ぎを分配するのを、「雪」がふりそうになってきたからとする。

9. 飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌 [z](惟然)
10. 鶯で工夫をしたる照降 [z](支考)
11. おれが事哥に讀るゝ橋の番 [z](芭蕉)

第10句では鶯の様子から「照るか降るか」天気を予測する方法を工夫している。鶯の様子とは声、あるいは飛び方もある。前句のいびつな弁当桶に火打ち石を打つ鎌を挟んで運ぶ人物が山仕事をやる人であれば、こういう工夫をして当然である。後句の橋の番人も、歌に読まれるような人物であれば、他人と違う点があるはずで、それが天気を予測する工夫であるとしているとすれば、天気を予測するという行為に対する当時の考え方がうかがわれる。橋の番人であれば当然の仕事と、現在ならば判断するだろう。いずれにおいても天気の予測が中心的題材である。

13. 平畦に菜を蒔立したばこ跡 [h](支考)
14. 秋風わたる門の居風呂 [h*](惟然)

15. 馬引て賑ひ初る月の影 [h](臥高)
 第14句、門口で風呂に入っていると「秋風」が吹いたということであるが、風呂には入っている人物は、前句でたばこの収穫の後に平畦のまま菜を蒔いて来たところである。後句での風呂はにぎやかな旅館の風呂になる。前句とも「秋風」が季で関わっているが、後句では「秋風」よりも風呂の関わりが大きい。

18. 正月ものゝ襟もよごさず [f](臥高)
 19. 春風に普請のつもりいたす也 [f*](惟然)
 20. 葎から村へぬけるうら道 [z](支考)
 第19句で「春風」が吹き始めたので普請を始めようと思積をしているのは、前句で正月の晴れ着を汚さないようにしている潔癖な性格でおそらく堅実な生活を送っている人物である。したがって、「春風」は季で関わるだけである。後句は普請を裏道の普請としたので、「春風」は関連しない。

25. 相宿と跡先にたつ矢木の町 [z](支考)
 26. 際の日和に雪の氣遣い [w*](惟然)
 27. 呑ごゝろ手をせぬ酒の引はなし [z](曲翠)
 第26句で、年末の「日和」に「雪」の心配をしている人物は、前句で相宿者と相前後して、おそら

第2表 巻別季数

撰集名	巻名	春	夏	秋	冬	雑
阿羅野	雁がねも	5	2	7	1	21
ひさご	木のもとに	8	2	10	-	16
炭俵	梅が香に	10	1	6	3	16
	空豆の	6	2	6	1	21
	振賣の	5	-	6	4	21
	平均	7	1	6	2.7	19.3
續猿蓑	八九間	8	-	6	2	20
	猿蓑に	5	2	9	3	17
	夏の夜や	5	4	6	2	19
	平均	6	2	7	2.3	18.7
合計	52	13	56	16	151	
平均	6.5	1.6	7	2	18.9	

(-:該当無し)

く商用のため八木の宿を忙しく出立する人物であり、天気を気遣うのは商用の能率を考えているためである。後句、無添加の手の加えていない酒が他を引き離して飛び抜けていると誉めるのは、冬という関わりだけで、天気を気にする人物に誉めさせる必要はない。

本巻の大気現象を含む句は6句であるが、現象としては8ある。降水に関するもの4、風に関するもの2、天候をあらわすもの2、気温表現無し。「秋風」、「春風」、「雪」(2句)と半数が季語と

第3表 巻別の大気現象を含む句の季別、長短数

巻名		春	夏	秋	冬	雑	計
雁がねも	長句	0	0	1	1	0	2
	短句	0	1	0	0	3	4
	計	0	1	1	1	3	6
木のもとに	長句	0	0	1	0	0	1
	短句	2	0	2	0	1	5
	計	2	0	3	0	1	6
梅が香に	長句	1	0	1	1	0	3
	短句	0	1	1	0	0	2
	計	1	1	2	1	0	5
空豆の	長句	1	0	0	1	3	5
	短句	0	0	2	0	0	2
	計	1	0	2	1	3	7
振賣の	長句	1	0	2	0	1	4
	短句	2	0	1	2	1	6
	計	3	0	3	2	2	10
八九間	長句	1	0	2	1	0	4
	短句	1	0	1	0	1	3
	計	2	0	3	1	1	7
猿蓑に	長句	1	0	1	1	1	4
	短句	0	0	0	2	0	2
	計	1	0	1	3	1	6
夏の夜や	長句	1	0	0	1	0	2
	短句	0	1	1	1	1	4
	計	1	1	1	2	1	6
合計	長句	6	0	8	6	5	25
	短句	5	3	8	5	7	28
計		11	3	16	11	12	53

なっている。

4. 季別句数等について

本節では、季別・長短句別・作者別等の大気現象の出現について集計し、若干の分析をこころみる。

季別の検討に先立ち、本文で対象としている8歌仙の各々の季の構成を第2表に示す。8歌仙の

平均で、春：6.5句、夏：1.6句、秋：7句、冬：2句、雑：18.9句となる。『冬の日』5歌仙の平均でこの数字は、春：7.6句、夏：1.8句、秋：8句、冬：4.4句、雑：14.2句（前報）、『猿蓑』4歌仙の平均では、春：6.5句、夏：3.5句、秋：6.5句、冬：2句、雑：17.5句（前々報）である。これは、季節を表す語がはいっている句に関する式目のうち、春・秋については3から5句続けるが、夏・冬は1から3句続けることの反映である

第4表 巻別の大気現象を含む句の作者別季数、長（L）短（S）句数、および大気現象

巻名	春	夏	秋	冬	雑	計	大気現象（句の番号）
雁がねも	越人18	—	—	L	—	S 2	雨(12), うはの空(29)
	芭蕉18	—	S	—	L	2S 4	風(06), 師走の空(09), 露(26), 雲(28)
木のとも	芭蕉12	—	—	—	—	0	
	珍碩12	S	—	2S	—	S 4	よき天気(02), 雨(08), 露(14,32)
	曲水12	S	—	L	—	— 2	秋風(15), かげろふ(18)
梅が香に	芭蕉18	L	S	LS	—	— 4	ばら々々・雲(05), 雨(10), 露(16), 東風々(19)
	野坡18	—	—	—	L	— 1	寒う(33)
空豆の	孤屋 9	L	—	S	L	L 4	あきかぜ(06), 雪(17,25), よこ雲・風(33)
	芭蕉 9	—	—	—	—	0	
	岱水 9	—	—	—	—	2L 2	雨(03), 風(11)
	利牛 9	—	—	S	—	— 1	照り(28)
振賣の	芭蕉 9	—	—	S	—	— 1	露霜(06)
	野坡 9	S	—	L	2S	— 4	時雨(02), あきの風(05), 淡気の雪(10), 暖(18)
	孤屋 9	L	—	—	—	— 1	雪(19)
	利牛 9	S	—	L	—	LS 4	吹きとられ(20), 日向(23), 風(31), 春風(36)
八九間	芭蕉 9	L	—	S	—	S 3	雨(01), 寒う(06), 空の晴る青雲(22)
	沾圃 9	—	—	L	—	— 1	日和かたまる(05)
	馬寛 9	—	—	—	—	— 0	
	里圃 9	S	—	L	L	— 3	風(07), 冬の風(31), かげろふ(36)
猿蓑に	沾圃 1	—	—	—	L	— 1	霜(01)
	芭蕉12	—	—	—	S	— 1	寒けれど(02)
	支考12	—	—	L	S	— 2	初あらし(15), 雪(24)
	惟然11	L	—	—	—	L 2	こち風(19), 風(31)
夏の夜や	芭蕉 7	—	—	—	—	0	
	曲翠 7	—	S	—	—	— 1	露(02)
	臥高 8	—	—	—	—	— 0	
	惟然 7	L	—	S	S	— 3	秋風(14), 春風(19), 日和・雪(26)
	支考 7	—	—	—	L	S 2	雪・雲(05), 照降(10)

う。ただし、次ぎに出すまでの間隔が、春・秋は5句、夏・冬は2句という式目だけからはこの結果は出て来にくい。また、式目からは夏と冬の句に数にこれほどの差が出て来ることも考えにくい。

第3表は、季別の長句・短句の数を巻毎および合計で示している。季別の長短合計数は、夏が少なく、秋が最多、春・冬・雑はほぼ同数である。しかし、第2表に示した全体の句数に対する比をみると、春：21.2%、夏：23.1%、秋：28.6%、冬：68.8%、雑：7.9%となる。最も顕著なことは、冬の句が大気現象を含む割合の高さである。大気現象を含む句の割合は18.4%であり、冬以外の季が大気現象を含む割合もそれよりは高いので、雑句には割合が示すとおり、大気現象が少ない。季のないことが雑句の定義であるから、大気現象が季と関連するのは当然であるが、特に冬、密接になることには別の理由が必要であろう。

また、巻により季別の長句・短句の数は当然異なるが、8歌仙で集計すると、春：長6・短5、夏：長0・短3、秋：長8・短8、冬：長6・短5、雑：長5・短7となり、全体では、長25・短28である。夏を除くとほぼ同数であり、大気現象を出すに際して長句・短句をあまり意識していないことが推定できる。

第4表は巻毎に、季別に作者別の大気現象を含む句の数と大気現象を発句からの順番を付して示したものである。作者別の句数は、芭蕉は全8歌仙に登場するので94句と最も多いが、そのうち13句が大気現象を含んだ句であり、13.8%となる。以下、登場順に示すと、「雁がねも」の巻では、越人18句中2句(11.1%)。「木のもとに」の巻では、珍碩12句中4句(33.3%)、曲水12句中2句(16.7%)である。『炭俵』の3歌仙では、野坡27句中5句(7.4%)、孤屋18句中5句(27.8%)、岱水9句中2句(22.2%)、利牛18句中5句(27.8%)となる。『讀猿蓑』3歌仙では、沾圃10句中2句(20%)、馬寛9句中0句(0%)、里圃9句中3句(33.3%)、支考19句中4句(21.1%)、惟然18句中5句(27.8%)、曲翠7句中1句(14.3%)、臥高8句中0句(0%)である。全体288句中大気現象を含む句53句(平均、18.4%)に比べて、10%程度以上多いのは、珍碩・孤屋・利牛・里圃・惟然であり、逆に少ないのは、野坡および、0句の馬寛・臥高である。芭蕉は平均より少ない

が、特に少ないとまでは言えない。

8歌仙中5歌仙に大気現象を含む13の句がある芭蕉について、第5表に季別長短句数を示す。これによると、長短句の数は季により偏るが、句数は雑句を含め各季あまり偏りなく出現し、先に述べた他の作者を含めた数字とは全く異なる。この事実が芭蕉の全体的な平衡感覚を示すものかどうかは筆者には現段階では判断できない。

第5表 芭蕉の大気現象を含む句の巻別、季別、長(L)短(S)句数

巻名	春	夏	秋	冬	雑	計
雁がねも	—	S	—	L	2S	4
木のもとに	—	—	—	—	—	—
梅が香に	L	S	LS	—	—	4
空豆の	—	—	—	—	—	—
振賣の	—	—	S	—	—	1
八九間	L	—	S	—	S	3
猿蓑に	—	—	—	S	—	1
夏の夜や	—	—	—	—	—	—
合計 長句	2	—	1	1	—	4
短句	—	2	3	1	3	9
計	2	2	4	2	3	13

5. おわりに

歌仙は、その各句が各々隣の句と順に関連していくことから成り立つ文学である。大気現象がその関連においてどの様な役割を果たしているかを、第3章で詳しくみてきた。大気現象が前後両句との関わりにおいて重要である場合は当然多いが、前後いずれか一方にしか関連しない場合も少なくない。また、前後両句あるはいずれか一方との関わりが単に季のみである場合も多い。こうした関わり方は、大気現象が季語となっている場合に以外に多い。わずかであるが、時刻・日付で関わるものもあった。なお、前・後句とも大気現象が全く関連しないとした場合が2例あったが、これらは「師走の空」と「日向」であり、大気現象とした点にやや無理があったのかもしれない。

歌仙に関するこれらの事実のもつ意味の評価は簡単ではないが、逆に、この作業を通じて大気現象に対する当時の理解がほとんど現代に通ずることを確かめることができた。その結果、当時が小氷期であったことを示唆する事例は発見できなかった。

なお、8歌仙中、前・後句との関連が明瞭に了解できなかったのは、「空豆の」の巻の第6句「どたりと塀のころぶあきかぜ」だけである。「夏の夜や」の巻の第10句と後句の関連で、天候予測を特殊視しているのは時代の違いを示していると判断したが、現在でも天候予測は普通の事ではないのかも知れない。

最後に、聳物・降物の句数・去嫌に関する式目に違反する例はなかった。これは当然のことであろうが、式目の限界丁度という事例すら一つもなかったことを一応報告しておく。

残された課題として、七部集の残した歌仙および七部集以外の芭蕉の参加した歌仙について同様な作業を行うことがある。その後で、芭蕉の発句、紀行文等での大気現象について調べることを予定している。

本文を、先頃お茶の水女子大学を御退官された、井内昇先生に捧げる。前報、前々報と引き続いて地理学科の先生方の御退官を、芭蕉七部集の歌仙について大気現象という局面からのみであるが、詳しく読む機会に利用したことをお許し願いたい。

注

- 1) 連句の第2番目の句を脇、第1番目句を発句という。なお、最後の句(歌仙の場合は第36句)を挙句という。
- 2) 和歌を上句・下句に分けて2人で作る場所から発生した連歌のうち、俳諧すなわち滑稽を追うものが「俳諧の連歌」と呼ばれるようになり、さら

にそれが洗練されるとともに、歌仙形式が多用されるようになった。また、擬声語・擬態語の多用に俳諧を求めたのは『炭俵』当時の特色であった。

参考文献

- 東 明雅・杉内徒司・大畑健治編(1986):『連句辞典』東京堂出版, 314P.
- 安東次男(1981):『連句入門 蕉風俳諧の構造』筑摩書房, 306P.
- _____ (1986):『風狂始末 芭蕉連句新釈』筑摩書房, 287P.
- _____ (1989):『続風狂始末 芭蕉連句新釈』筑摩書房, 216P.
- _____ (1990):『風狂余韻 芭蕉連句新釈』筑摩書房, 216P.
- 乾 裕幸・白石悌三(1980):『連句への招待』有斐閣, 259P.
- イポリート・テーヌ, 丸山誠次訳(1939):文化史の諸原動力と風土(英文学史序論).『文明と風土』改造社, 12-58.
- 上野洋三(1992):『芭蕉七部集』岩波書店(岩波セミナーブックス102, 古典精読シリーズ), 204P.
- 内田正男編著(1975):『日本暦日原典』雄山閣出版, 560P.
- 高橋英夫(1992):『ミクロコスモス—松尾芭蕉に向かって』講談社(学術文庫), 360P.
- 白石悌三・上野洋三(1990):『芭蕉七部集』岩波書店(新日本文学大系70), 650+49P.
- 田宮兵衛(1990):『猿蓑』の連句における大気現象について. お茶の水地理, 31, 9-15.
- _____ (1992):『冬の日』における大気現象について. お茶の水地理, 33, 17-25.
- 中村俊定(1962):連句篇.『芭蕉句集』岩波書店(日本古典文学大系45), 281-517.
- _____校注(1966):『芭蕉七部集』岩波書店, 446P.

Weather in 8 KASENs from
“ARANO”, “HISAGO”, “SUMIDAWARA” and “ZOKU-SARUMINO”
Hyoë TAMIYA